

【シンポジウム報告】

## 初等社会科授業研究の基盤構築に向けて

### — 仮説推論的な学習方法の提案と授業評価スタンダードの開発 —

關 浩 和  
(兵庫教育大学)

#### 1 初等社会科授業研究の現状

授業研究は、ある理論に基づき仮説を設定して、実践を行い、仮説を検証し、応用可能な一つの真理を追究する実証主義的な研究が基本である。しかし、教育実践研究者の立場で考えると、実践者自身の自己成長のために自ら行動(action)を計画して実施し、その行動の結果を観察して、その結果に基づいて内省(reflection)するアクション・リサーチの研究の必要性を再認識する。

特に、社会科授業では、小・中学校の校種で大きな授業観の違いが見られる。単元の知識構造を明確にして、順序よく効率的に知識内容を教授する中等段階での授業に対して、子どもの思考や発想で大きく左右され、教師の授業対応力に関わる力が重視されるのが初等段階での授業である。授業観が違うのだから、それぞれ別々のフレームワークが必要なのに、授業研究をする視点や評価する視点が同じように論じられている。この点にずっと違和感を持ち続けている。初等社会科授業研究は、子ども理解に基づくボトムアップ的な授業理論の確立が今こそ必要である。

#### 2 初等社会科授業研究の基盤構築に向けて

##### (1) 仮説推論的な学習方法の提案

初等社会科授業は、教師側からのトップダウンの授業構成ではなく、子どもの興味・関心を基にして、ボトムアップ的にトピックを次々と展開させていくことで学習問題に迫っていく仮説推論的 abduction な学習方法論を提案する。それを具現化したのが、ウェbbing Webbing 法である<sup>(1)</sup>。

ウェbbing法とは、クモが巣をつくるように、次々と思いつくことをつなげていく発想法である。子どもの主体的関与を基に、個々に知識を構築していくウェbbing法は、①子どもの基本的認知

構造は、構成要素(ノード)とそれらの要素の関連(リンク)がネットワークのシステムとして構成されている。②子どもの基本的認知構造は、知識の内部表現としてとらえ、その構造を知識の外部表現形式として解明することができる、という二つの特性を有している。このノードとリンクの考え方にに基づき、子どもが、新しい知識を獲得したり、再構築したりする過程において、既存の考えを組み換えていく。子どもにとって組み換えていく過程を図式化することで、状況的理解を得ていく。その際、教師は、子どものつながりを構築していく過程の促進的役割を担うことになる。

ウェbbing法には、①学習設計的機能②学習内容創出的機能③学習省察的機能という三つの機能を位置づけている。これらの機能を活用して子どものトピックを関連づけて、できあがってくるウェbbing図は、キーワードの塊である。キーワードは、大切な概念を凝縮したものである。子どもは、ウェbbingを繰り返すことで、キーワードに概念を凝縮する力がついてくる。

複雑に絡み合う状況が日々変化し続ける今日、限られた時間の中で、社会的事実・事象の本質を理解し、有効な解決策を導き出すには、それ相応の方法が必要である。ウェbbing法は、社会的事実・事象の構造理解と論理的な思考という二つの行為を同時進行的に可能な方法である。新しいものを生み出すことは、「新しい関係の構築」ができるということである。言語力の育成が求められている中で、いくら自由記述でも言語化の方法のみで、文章に表すのはなかなか苦手な子どもが多い。それは、シーケンシャル(連続)に論理を矛盾なくつなげていく必要があるからである。図式化の方法にしても、視覚的に言語を補助するた

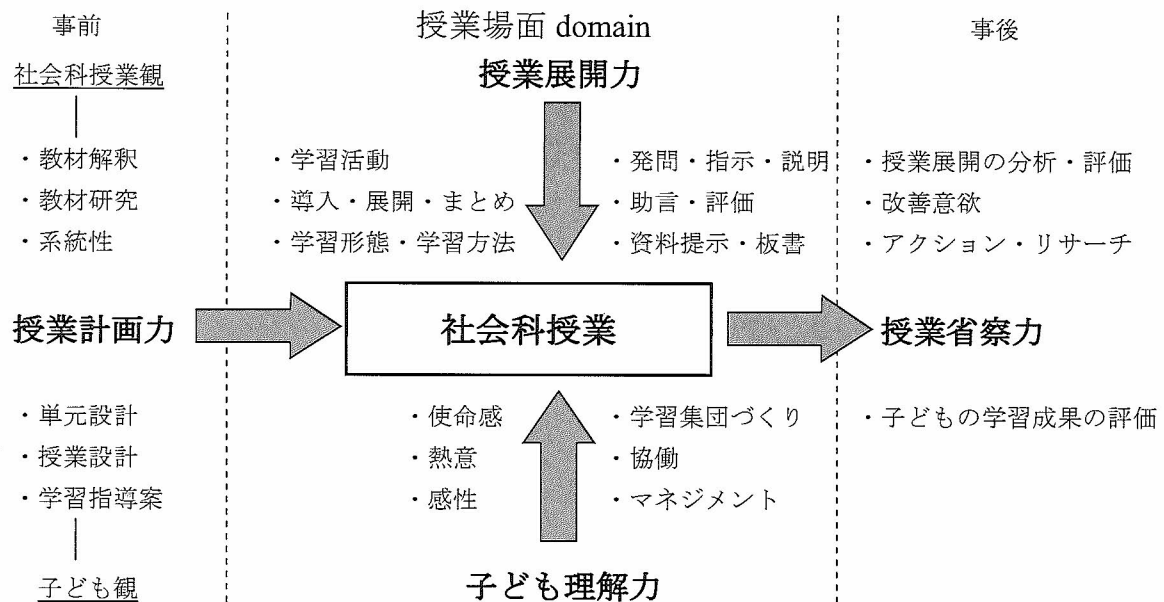


図1 初等社会科授業力の構成要素

めに位置づけられている場合が多い。ウェッビング法は、言語化と図式化を統合した方法で、ランダムアクセス（非連続）で思考を鍛えていく有効な手法である。

## (2)授業評価スタンダードの開発

授業は、不断の再設計過程である。初等社会科授業力の構成要素を図1に示している。授業力向上のためには、事前・授業場面・事後のそれぞれの場面で、①授業計画力②授業展開力③子ども理解力④授業省察力という四つの力が必要である。魅力ある単元・教材が構想できただけでは授業はできない。現在、系統性のあるカリキュラムに基づいて、子どもの発言や行動に瞬時に対応できる力、子どものニーズや能力、個性などを理解しながら、社会科に情熱をもって授業が展開できる力などをバランスよく評価ができる授業評価スタンダードの開発を模索している。その際、学校現場に寄与できる意義ある研究をするために、大学と現場が協働で授業評価スタンダードの開発を行うピア・ラーニング的発想で取り組んでいる。

## (3)授業研究の基盤構築に向けて

初等社会科授業研究の基盤構築のためには、社会科授業を創ることの楽しさや子ども対応の楽しさを伝えていくことが必要である。ほとんどの研究者は、社会科教育研究の難しさを伝えている。難しいことを難しくして、簡単なことまで難しく

している。そのような研究者とは一線を画した研究になるために、次の三点を述べておきたい。

### ①メタを問うものの見方を鍛えること。

社会科授業の基本は、物事の前提を疑うことから始まる。本当にこれで正しいのか。この考えとは別にどういう考え方ができるのか。目の前の現状や既存の価値観、通説などに対峙して、自分の下した判断を常に問い続けること（＝批判的リテラシー）が必要である。

### ②関係論的なものの見方を鍛えること。

なぜ、ウェッビング法を提案しているのか。それは、すべてのものが関係性で成り立っているからである。社会科授業では、子どもは、物事を複数の要素が相互に関連し合っている関係の束であるという見方や考え方ができなくてはならない。

### ③概念変化が起きる授業を創ること。

起きている現象・事象はそのままでも何も変わらないのに、子どもの見方・考え方が大きく変わる。この概念変化が起きることこそ、授業のおもしろさである。概念変化によって、教師も子どももおもしろいと思える社会科授業にしていきたい。

## 【註】

(1)ウェッビング法及び詳細な社会科授業実践については、拙著『情報読解力形成に関わる社会科授業構成論』風間書房、2009年を参照されたい。